天地人(葱)(仮)

末広 ガリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天地人（葱）（仮）

【Ｎコード】
Ｎ２６５８ＢＡ

【作者名】
末広　ガリ

【あらすじ】
男が『ネギま』の世界に降り立ちましたとさ。

００．はじめに

この小説は天地人シリーズの二作目です。
話の最後に前作の簡単なまとめを載せていますので、単純に二次創作が読みたいと言う方は、前作を飛ばしていただいても結構です。
完結後か何かしらの理由をつけての途中からかは分かりませんが、更に別の作品に飛ぶ予定です。

この小説は二次創作ですが独自設定があります。
また、主人公的存在である神代龍哉の原作知識は、設定改変前の部分と改変後の部分の両方の場合があります。
例えば、「ナギが女なのは知っているがラカンが女なのは知らない（あくまで例えなので本編には関係なし）」などです。
基本的には神代氏に都合のいい世界で、無理矢理な展開も出てくると思います。
特に神代氏に惚れる描写を省いたり、理由が曖昧だったりすることが多そうです。
神代氏の魅力値が高すぎて周りの男が眼に入らないような理由もあるんじゃないですか？分かりません。

前作で何も学べず、相変わらずの稚拙さです。
口語多めです。
元々原作の主要キャラが多いのに加え、オリジナルのキャラクターもいるので、一人ひとりの出番が少なくなったり、誰が話しているのか分からなくなったりすることがあるかも知れません。
なるべく個性を出せるように心掛けていますが、先に謝っておきます。ごめんなさい。個性の出ないキャラクターさん、ごめんなさい。

……もういいよね？
はい、言い訳終了。

←←以下、前作のまとめ←←

あるところに、それなりに不幸な男がいました。
男は死にたかったので死にました。
閻魔大王の勘違いで地獄に落ちました。
後に疑いは晴れましたが、転生はしたくないのでそのまま地獄で１０００年ほど修行しました。
天界へ行けることになりました。
神や天使と仲良くなりました。
男は大昔凄い神だったことが分かりました。
人間界の神話で主神として崇められている神のほとんどは、当時の男の子供（魔法で創ったので母親はいない）でした。
神だった男が人間界へ行く途中に悪い神が悪いことをして、男や男の前世が不幸になってしまったことが分かりました。
修行のためにＨＥＬＬ（男が最初に落ちた地獄とは別の地獄）に行きました。
サタンと会って子供を拾ってルシファーと名付けました。
地獄で獄卒を鍛える教官をやりました。
人間界のどこか（行先ランダム転移）に旅行に行くことになりました。

終わり。

――――――――――――――――――――――――――――――――

んじゃー興味があれば第一話へとお進みくださいな。

01．はじまり　はじまり（前書き）

年に1回くらいは更新したいなぁ。

01．はじまり　はじまり

「…見事なまでの殺風景だな」

目に映るは辺り一面、荒野荒野荒野。

「冒険のニオイがしてきたねー♪」

見知らぬ土地に、三人は降り立った。

「どこかに人は居るのでしょうか…？」

果たして彼らを待ち受けているものは何なのか。

「ボクたちの冒険は、まだまだ始まったばかりだよ！」

「――そりゃそうだろ。つーかここ何処(どこ)だ、まるで荒野だぞ…」
「『まるで』じゃなくて、普通に荒野です。荒野しかないです」
「適当に歩いてればそのうち見つかるんじゃない？」
「うーん…そうだな。じゃあ靴を投げて、つま先が向いた方に行こう」
「賛成ー！」
「まぁ…当てもないですし、そうしましょうか」

Ｓｉｄｅ　イシュタル（リーゼロッテ）

「あ…龍哉、何か見えるよ！」

やっほーリゼだよ！この三人で旅行なんて、それだけで楽しくなると思ってますッ。
歩き始めて３時間…わいわい言いながら進んでいたら、何かが見えてきたよ。
ボクやユニじゃハッキリとは見えないから、ここは龍哉に確認してもらおう。

「ん、どこ？見えんわ…」

「あれだよあれー」

あれ？龍哉って凄く目が良いハズなんだけどなぁ。
そう思いながら、見えた方向を指差したんだけど…

「……おっかしいなぁ、全然見えないよ。仕方ないから視力強化するか…」

視力強化まで使うなんて…目を細めたりとかしていたけど、全く見えてなかったみたいだね。
龍哉ったらどうしちゃったんだろう…ユニも心配そうに見てるし。

「んーとあれは……街か。やっと見えたなぁ」

「え、ホント！？何があるか楽しみだなー♪」

ようやく何があるのか分かると思ったら、まさか街だったなんて。
龍哉のことも気になるけど、やっぱりそっちも気になっちゃうな。
これからのことを考えると、自然と歩くスピードも上がってしまう。

「リゼ様、楽しそうですね」

「あぁ、来て良かったな」

ふふん♪
おっとと、いつの間にか目の前に街が…えーっと、ウェスペルタティア王国領…？

「タツー、知ってる…って、どうしたの？」
振り返って龍哉を見ると、そこだけ時が止まったような…そんな表情を浮かべていた。
「ウェスペルタティアって……おい…おいおい……まさか…いや……まさか…な…」
動揺してるなんて珍しいね…。
「あ、あの…龍哉さん？」
「いや、これあの……うん、ボケることすらできないわ…」
「ど、どうしたの？こういう時はえーと…変なモンでも拾い食いしたのか？…だっけ」
「食ってへんわ！……よし、ありがとうリゼ、助かったよ」
やた！復活したみたいだね。
もしもの時のために、教わっておいて良かったよ。
「それで…龍哉はこの場所を知ってるの？」
龍哉が元に戻ったところで、質問の続きをする。
「あぁ、確証はないが、ウェスペルタティアで王国なんて言うなら恐らくは…な」

「深刻そうですけど、何かマズいことでもあるのですか？」

「いや、問題はない。自分がここにいるのが、少し信じられないだけだ」

「伝説的な場所とか？でも地球でそうやって言われてるとこって、大体ボクたち神が関わったりしてるようなものだけど…」

「……火星だ」

「「へ？」」

「ここ、多分火星だ」

「火星って…あの火星ですか？」

「そうだ。この世界は魔法世界（ムンドゥス・マギクス）と呼ばれ、今現在の時代が分からないから何とも言えないが、この星のものは生物含め少なくともほぼ全てが、魔法によってつくられている」

…どういうこと？

「…アヌ様たちの使う創造魔法の一種ですか？」

「あぁ、そんな感じだ。まぁ食い物は食えるし、人にも意思がある みたいだけどな。普通に死んだりもするし…それら全てが幻想だが、幻想と言うにはあまりにリアル過ぎるものだ」

え、え～っと……？？？

「ちょっとよく分からないんだけど…」

「胡蝶の夢のようなものだと思ってよろしい…結局、例え幻想と言われようとも本人たちがそれを知らなくとも、ソコには確かにソレがあり、俺たちにとっても本物だ。だからまぁ…何も考えずに楽しめばいいよ」

「ふーん……分かった！じゃあ早く街に入ろう！」

「うむ。ほら、ユニも行くぞ」

「え？あ、はい！」

楽しむだけなら、簡単簡単♪

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　龍哉

「とりあえず宿屋を探しておくか？」

まさか『ネギま！』の世界が実在しているとは…。
現段階ではまだ可能性に過ぎないが、本当だとしたら造物主（ライフメイカー）に会っておかねばな。
食事や入浴中に《リライト》を使われたら、凄く嫌な気分になるだろうし…。

原作知識に関してはほぼ完璧だ、思い出そうという意思があれば思い出せる。
それに、何かあれば原作本出せばいいだけの話だしな。
とにかくここは並行世界だ。
少なくとも俺たちがいる時点で、原作とは完全に一致していない。
臨機応変に対応しよう。

「え～、ご飯食べたいなぁ」

「…俺の魔法で街の外に一時的に家を建ててもいいが、せっかく来たんだから地元の宿に泊まりたいんじゃないか？なくなる前に部屋をとっておいた方がよいかと思うのだが」

「言われてみればそうかも…じゃ、早く行こッ」

「――さて、これからどうする？」

割とすぐに宿屋を見つけることができた俺たちは、現在レストラン

らしきところで食事をとっている。
「んー…何か名所みたいなのはないのー？」
「名所と言うか…遺跡とかはあるぞ」
「おお！それは面白そうだね！」
ニヤリと笑いあうリゼと俺。
「うむ。冒険…キテるな」
「やるよ…！ボク、やるよ龍哉！」
「あぁ…やるぞ！世界中の宝を集めるために！」
「ボクは…ただただ冒険のために！」
「わ、わたしは…お二人がやらかさないようにするためです…！」
ロマンッ…！今こそ宝を…集める時ッ…！！
フフフフ…サタン、もうお前だけにいい格好はさせないぜ。

―――――――――――――――――――――

「うわぁ…真っ暗だねぇ……」

ここは【夕暮れの迷宮】…入り口の看板にそう書いてあった。
そうしていざ入ってみると、そこはさすがに迷宮だ。真っ暗である。
「…道を照らせ　Ｌｕｍｉ？ｒｅ　ｄｕ　ｃｏｎｓｅｉｌ《導きの光》」
暗闇でも内部の構造を知る手段はいくつか持っているが、ここは二人にも有効なこの魔法がいいだろう…そう思って発動したのだが…。
「あ…ゴメン、明るすぎるね。雰囲気出ないわ」
あまりにも明るくなりすぎてしまった。
目の届く範囲は隅から隅まで照らされている。
これでは迷宮の中に小さい太陽があるようなものだ。
「あの、怖いのでわたしは今ぐらいがちょうどいいです…」
「え～…ボクはやっぱり、少し薄暗い方がいいなぁ…」
「んー、ごめんねユニ……少し照らせ　Ｌｕｍｉ？ｒｅ　ｄｕ　ｃｏｎｓｅｉｌ《導きの光》」
魔力量を調節してもう一度やってみると、今度はいい具合の光加減になった。
ユニには悪いがここは迷宮だ…ロマンなのだ…暗くなければ、意味がない！
「いいです、くっ付かせていただければ…」
「あいあい、もちろんＯＫよ」

ユニは可愛いねぇ。
さてェ…雰囲気も出たところで、探索開始しますか！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　ユニ

「グォォオォォ…！」

ユニです。
たった今、紫色のおっきな怪物がリゼ様によって倒されました！
なぜそんなのがいるかと言いますと、迷宮の所々に罠が仕掛けてあり、その中に召喚用の魔法陣もあったんです。
まぁその悉くがリゼ様に沈められていますけれど…。

「楽しいねー♪」

「派手にやっとるのう…」

冒険が出来てテンションの高いリゼ様。
それに比べて、少し落ち込み気味の龍哉さん…実は宝物が、その…
大した物がないようで…。

「いや…最後まで希望を捨てちゃダメだ…諦めたら、そこで試合終了だ…！」

自分で自分を奮い立たせ、一歩一歩前へ進む龍哉さんの手を握って、わたしも進みます。

「ウガアアアァァ！！」

「あーまた何か出…た？…こ…こいつァ…！」

「なに！？なんか凄いの？…もしかして物凄く強いとか！？」

しばらく進むと、また別のモンスターが現れました。

そちらを見たと思ったら、龍哉さんは急に驚いた顔を…どうしたんでしょう？

「おい…二人とも、あそこを見てみろ…」

彼の指差した先には……えと、藁人形…でしたっけ？

「…あれがどうかしたの？」

「どっぷり西洋風な迷宮…そこにポツンと不釣合い過ぎる和風藁人形が…あれは絶対に、何かあるぞ…怪しすぎる…！」

よ、よく分からないですけど、元気になられたようで良かったです。

「よっしゃ、ちょっとお前邪魔」

「ギャウッ…」

藁人形に夢中になっている龍哉さんは、モンスターを撫でるような一撃で沈めて進みます。
そんな時でもわたしの手を離すどころか、握る力が強まっていて…素敵です！

「ほほう…この洗礼された美しいフォルム、まさに完璧な作品だ。藁も上質なものを使っているな。素晴らしい…」

えーと…全　く　分　か　り　ま　せ　ん。

「これはぜひコレクションに…？お…おおおぉぉ！？キタ！コレ、キタよ！」

「えっ？えっ？」

「きゃっ！」

人形をひとしきり眺めた後に彼が拾おうとすると、突然人形がピクッと動きました…！
うぅ…怖いですよぅ…。
わたしは龍哉さんの手をガッシリと握って、その背中に隠れます。

「…立った！人形が立った！」

「…（ペコッ）」

人形が立ちあがり、龍哉さんもどんどん壊れていきます。

「ペコッって…ペコッって…可愛すぎるやろおおおお！！！ブハァッ！」

「ちょ、大丈夫！？」

ついに興奮が最高潮に達してしまった…！？

龍哉さんが突然血を…！！

「ごほっごほっ…大丈夫だ、ギャグだから…」

「そ、そう…ならいいけど…」

そう言えば、天界でもたまにこんなことがあったような…。

確か、可愛過ぎるものを見ると噴出してしまうとかなんとかって、言っていましたね…。

わたしを見てなったことも何度か…まぁ正直、嬉しいですよねぇ～…にへへ。

「ふぅ……君、私についてこないかね？」

「……（ペコリ）」

龍哉さんが尋ねると、小っちゃく頷いたお人形さん…た、確かに可愛いかも知れません…！

「フフフフ…よろしくな、エリザ」

「！……（ペコペコッ）」

「嬉しそうですね～、もう名前をつけたんですか？」

「第一印象で決めてました、ってヤツだな」

「よく分かりませんけど…よろしくお願いしますね、エリザちゃん」

「よろしくね～♪」

「……（ペコリッ）」

「よっしゃ、楽しくなってきたぞ！行こ行こ！」

「うん♪レッツゴー！！」

エリザちゃんを肩に乗せ、ご機嫌な龍哉さん。
その手を握り、ついていくわたし。
それを先導するリゼ様。
仲間が一人増えて明るい雰囲気の中、先へ進みます。
ちょっと怖かったけど、ここへ来てよかったですね。

01．はじまり　はじまり（後書き）

Ｌｕｍｉ？ｒｅ　ｄｕ　ｃｏｎｓｅｉｌ《導きの光》――解説の必要なし。

――――――――――――――――――――――――

【神代（かみしろ）　龍哉（たつや）】

●年齢　現在１９６７歳（プラス前世経験分の約２５００歳）

●性別　男

●種族　人間かも知れない、人外かも知れない、真相は闇の中…。そのうち神になるかもね。

●一人称　俺・私・僕・儂など、癖でコロコロ変わってしまう。合わせて口調も変化。

●外見　大抵は黒い短髪で黒い瞳。１９０ｃｍで、体は主に引き締まった肉と内臓でできている。いわゆるソース顔で、昔風の典型的な日本人。ただのイケメン。ファッションには統一性なしだが、本当は落ち着いた雰囲気のものを好む。煙草と、視力強化をしていない時は眼鏡や度の入ったサングラス等も装備。外見に関してはいくらでも変えられる能力をお持ちなので、これが基本程度に思っておいて下さい。

●性格　不安定。基本的には正直者で優しい人。努力家で完璧主義だが、興味が湧かないことに対しては横着者。小さなことでも深く考え込んでしまう。感情表現は苦手。許すべきではないことや、許したくないことまで許してしまったりする自分を責めている。

●詳細　前世を含めると、４０００年以上かけてようやく幸せを掴みかけているような感じの人。他人を惹きつける不思議な魅力があるらしい。そういえば元神様。これくらいでもういいよね？…あ、

才能の塊が色々頑張ったような感じの人なので、基本的には何でもできます。P．S．ニコチン中毒を治す気はなし。裸眼状態の視力はマジで滅茶苦茶本当に凄く悪い。

※内容は掲載された話の時点でのものです。

――――――――――――――――――――――――

書いたのが二か月くらい前なので、当時の自分との温度差を感じます。
でも手直しとか面倒なんで基本的にやりませんち。
後書きにオリジナルの魔法の解説と、1～3人ずつくらいで人物紹介を載せます。
もしかしたら、各章の終わりにもまとめて載せるかも。
おわり。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2658ba/

天地人(葱)(仮)

2012年1月6日20時56分発行